



Title	研究 : 米と小麦
Author(s)	中島, 九郎
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 10, 1-18
Issue Date	1942-06
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/10709">http://hdl.handle.net/2115/10709</a>
Type	bulletin (article)
Note	研究
File Information	10_p1-18.pdf



[Instructions for use](#)

# 研究

## 米と小麥

中 島 九 郎

いふまでもなく今日世界的食糧として、米と小麥とが東西の兩横綱を形成し——表面上世界産額に於ては玉蜀黍は小麥や米に次ぐやうであるが、併し玉蜀黍は家畜家禽の飼料にも供せられるので人間の食糧としての重要度は一層低下するを免れぬ——世界二十億の人口の中その約八割即ち十五六億の人口は此等兩種の穀物に依つて養はれてゐるが、その産額は不思議にどちらも殆んど一億五千萬廬で（小麥の方が少し多いとの説もある）兩者合せて三億廬に上る勢ひである。併し昔は米の方が小麥よりも盛んであつた。今この二つの穀物につき經濟上色々の角度から簡単な比較を試みて見たいと思ふ。

先づ小麥は西洋では第一次歐洲戦争の際に交戦各國から食糧としての重要性に對し非常に認識を高められ、獨逸の敗因は戦鬪に非ずして寧ろ食糧難であつたといはれる程であり、その後も供給の過不足何れにせよ各國に向ひ問題を提供して今日に至つた。然るに米の方は支那事變始つて以來も世界全體として眺めれば小麥ほど世の中

の關心を惹くに至らなかつた觀がある。但し我が國は例外で米を中心として食糧問題が非常に沸騰した。同じく世界の主要食糧品であり又産額も同じいにも拘はらず、かくも米麥の間に輕重の差が何故生れたかといへば、それは米は概ね自給的作物で貿易品としては局地的なものであり、小麥はその反對に營利的商品で同時に重要貿易品であるからだ。けれども米問題は我が國では前一言せる如く近頃中々やかましい問題となつて來た。昭和十四年南鮮及び西日本を襲ふた旱魃のため水稻の大不作となり、内地外地を通じて非常な米の不足を來し、外米の輸入を激増するの餘儀なきに立ち至つた。遂にその年十一月に酒井農相が、その數ヶ月前まで玄米一石三十八圓であつたのを一度に五圓引上げて四十三圓となしたところ忽ち天下の耳目を聳動し重大な政治問題とまで發展した。例の九・一八の物價停止令公布直後のこととて無理もないが今から考へれば時を得た措置であつたかも知れぬ。更に昨年八月に至り所謂二重價格制を採用したが、これは米の増産を主目的としたもので、(一)農家の販賣米に對し石五圓の生産獎勵金を與へ、(二)政府の米買上價格を一圓引上げ、(三)銘柄等級の整理により實質上一石五圓に一圓に當る割増を與へると同時に、(四)消費者への販賣價格はそのまゝに据置くことにした譯で、今まで石四十三圓のものが約五十圓に高められた計算となる。又米の消費方面では昨年四月から米の通帳制が實施されるやうになり、我が國の食糧問題は米を中核として俄かに深刻化するに至つた。

次に世界の米と小麥について消費・生産・貿易など各方面から對照することにしよう。それより先きに一寸小麥と米に對する外國語を求めると、小麥は wheat (英)、Weizen (獨)、blé (佛、語源は blennir ならんとのこと)の三國語とも白色を意味するが、それはライ麥などに比べ小麥の穀粒の色が白いためであらうと或外國の學者は説いてゐる。米の場合には rice (英)、Reis (獨)、riz (佛)、risô (伊)であつて、綴りや發音が何れも殆んど同じであるのは恐らく植民地商品(コロニアル商品)の一特色をなすものであらう。さて兩穀物の消費から述べるならば、小麥は今日主に

白色人種の常食物であるが、アジアの西半部や歐洲や北アフリカでは非常に悠久な昔から小麥は穀物の首位を占めてゐた。米はそれに對し歴史始つて以來黄色人種や褐色人種の主食物であつて殊に日本人を以て最とする、そして又小麥とは違ひ近頃になつて新たに米食地域乃至は米作地域に編入されたといつたやうな地方は少い。斯様に米と小麥に依て大體人種間の分野が決つてゐると見て宜しい。——但し英國などでは、今次の歐洲戰爭開始以來政府が代用食として米の消費を奨励するに至つたのでロンドンでは米の需要が増し在住日本人が一時困つたさうだ、それに對し米食の我が國では麵類（原料は小麥）を代用食の一つに奨めて居る現狀であり米麥入り亂れての東西の活躍は面白い、支那・日本を始めアジアの米食國に於ても小麥は米に次ぐ主要食糧となつて居る。——

卑近な話ではあるが、小麥即ちこの場合小麥パンは西洋では單に炊立の一部分をなすに過ぎないが、米はその反對に東洋諸國では主食物となつてゐる。併し同じ米でも西洋に行けば副食物に格が下り、皿の一隅に押し込められる有様だ。更に滑稽なのはパンは焼立でなく焼いてから何時間か經つて冷へ切つた後に食膳に上せるものであるが、米飯はそれとは逆に炊立のフウ／＼いふやうな熱いのを食べるのが普通であり、それが東洋人には好かれてゐる。但し猫舌の人は例外である。次に米に對する米食人種の愛着心はどうかといへば、小麥に對するパン食人種の愛着心よりも強烈なやうである。殊に我が國民が粘性に富む日本米に對する嗜好は特別なものと從來されてゐた——同じ主食物とはいひながら日本に於ける米の地位は歐洲諸國に於ける小麥やライ麥の場合に比べその住民に取り遙かに重要である——ところが支那事變以後特に最近數年來外米の夥しい輸入と消費とを餘儀なくされるに至つた今日、國民一般も次第に外米食に慣れて來て假令外米でも麥よりは米といふ風になりかけてゐるやうだ、殊に生活水準の低い人々の間では外米の方が水分の吸収率高いため日本米よりも炊殖がするといふので重寶がられる傾さへあると聞いて居る、殊に外米は榮養素にかなり富んで居ることであるから、尙更將來外

米に對する我が國民の消費の風習がだんだん進んで行くかも知れぬ。斯様な譯で東洋人種の米に對する執着は半  
乎として抜くべからざるものがある。小麥パンの消費も東洋取り分け日本に於ては將來多少殖えるではあらうか  
(近頃食糧協會の設立に係る食糧學校ではパン科を設け、男女中等學校出身者を入れて製パン士の養成に乗り出  
さうとしてゐるのを見ても想像出来るが)、併し米との競争には恐ろくなるまい、それは嗜好の外副食物の關係か  
らも來るであらう、それについては故酒匂常明氏が今から五六十年前、北海道に食物改良論の盛んであつた頃、  
その名著「米作新論」の中でパンにはスूपやバター・ハムが附物であつて、パンに味噌汁・澤庵では變ななも  
のでないかとパン食論者を攻めたことがある、併し米食を補ふために我が國の適地に於て郷土食や郷土パンの研  
究普及に努むべきはいふまでもないであらう。

一人當りの米麥の消費量は、世界を通觀する時近頃米も小麥も共に減つて行く傾向があるやうであるが、その  
原因に至つては互に違つて居るのが面白い。小麥の減るのは時勢の變遷につれての食事獻立の多樣化、いひ換れ  
ば食事内容の質的改良を意味するのであつて、元來パン食人種は一般に生活文化が進んでゐるためかゝる變化を  
來すものといへよう。ところが米の場合どうかといへば、一方には米の適地なるものは水利氣候その他の關係  
上自ら湖約され、その上米作地帯に於ける栽培技術が劣つて居るため米産額の増加は從來發展性に乏しかつた、  
それにも拘はず他方に於ては米食人種の急速なる人口増殖の結果、止むなく一人當りの米の消費量が減るので  
あつて米の場合は小麥の場合とは違ひ米食國の一般住民の生活水準の低下を意味する、——但し我が國は例外で  
生活水準は却つて向上を續けた——あの食糧は算術級數で殖えるが、人口は幾何級數で殖えて行くといふマルサ  
ス人口論の鐵則がこゝに適用された譯である。

以上は米と小麥の消費方面のことを述べたのであつたが次に生産方面に移らう。先づ地理的分布をいへば、小

麥は北は寒帯の近くまで栽培され、北米合衆國の國境を北に距る一千哩以上北緯六十五度三十分のあたりで小麥の生育が行はれたといはれるし、又南はブラジルの南部や玖馬島の如く熱帶圈内にも育つ、併し大體は温帯の作物である。そして小麥の生産地方はソ聯・歐洲（佛・伊・獨其他）・カナダ・北米合衆國・南米（アルゼンチンが主）・濠洲、ニュージールランド・支那・印度などであるが、以上の中には大陸も含まれてゐるのでそれを除き一國として眺める時産額の多いのは、ソ聯を筆頭としそれに續くは北米合衆國・支那の順序であり、何れも世界で領土の廣大を誇る國々である。米はアジアの南東部に位する大陸及び諸島即ち支那・印度・日本・ビルマ・佛印・蘭印・泰・比島を主産地として居る。近年南米諸國に於て米の産出が著しく殖えて來て、ブラジル（この國は第一次歐洲戰爭までは米の輸入國であつたが近頃は逆轉した）及びペルーは今では米の輸出國に加つたほどである。外に尙ほ埃及も米の輸出國の仲間入りをするやうになつたが此等數箇の新米産國のその方面に於ける重味は未だ微々たるものだ。米は今述べた主要生産地域から見ても判るやうに元來熱帶亞熱帯の作物ではあるが、併し風土に對する適應性（品種改良の結果）も中々強く北緯五十度近くまで或はそれを越えてさへ作られてゐるところがある、滿洲やシベリアはその例だ。我が國でも北は樺太西南海岸地方で數年前試作程度とはいへ若干栽培されたことがあり、その内幌村役場から私は收穫糶の分與を受けたことがある。

世界全體として眺める時には、米の生産過剰なる現象は將來一寸起りさうにも見えぬものとされてゐた。何故かといへば米食人種は目下のところ日本人を除き生活水準がかなり低いのであるから、今まで米を欲しても十分に消費し得なかつた人々は機に乗じその消費量を増さうとするのであらうし、又低級な穀物に今まで甘んじてゐた人々は折を見ては米食に轉じようとするであらうから米の需要は勢ひ増さざるを得まい、その結果米の生産過剰は中々發生の餘地がなさうに見える、但し將來に於ける大東亞共榮圈内の米の問題は後に述べるやうに別箇

に考へねばならぬ。

然るに小麦の場合には近年輸出側にて生産過剰の現象を呈するに至つた、彼の米國の A A の生産制限上の活動の如きは有名なものである。そんな有様であつて小麦は米とは反對に生産不足は將來とも一寸起りさうにも見えぬ。今から三四十年前以前に、英國科學振興協會々長 (President of the British Association for the Advancement of Science) たるサー・ウヰリアム・クルックス (Sir William Crooks) が一九三一年になると人口増加の結果世界に小麦の大不足が襲つて來るであらうと豫言したことがあるが、(P. F. Dondlinger, The Book of Wheat 1916. p. 316), 併しこの豫言は事實と反對であつた。要するに生産が不足しさうに見えて不足しなかつた不思議な作物は小麦であらう。それといふのはつまり一面には新たな土地が次から次へと開拓され、そこに機械耕作に依て小麦の收穫をドシ／＼殖して行つたのと、他面には又小麦を消費する白人の人口増加が緩慢であつたからとせねばなるまい。佛蘭西は以前から人口増加率の少いので有名であり、獨逸ですらナチスが政權を獲得するまでは暫らくの間人口資源の前途に發展の望みの乏しかつたので困り抜いてゐたのである。

小麦作といふものは土地・資本・勞力の生産三要素の内土地と資本とに重きを置くものであるが、米作は之と反對に勞力に重きを置いてゐる。小麦作は西洋では廣大なる面積の上に能率の高い大規模の農具機械を使用する者が多く、小麦の輸出國に於ては尙更のことである。時としては幾千町歩とも知れぬ巨大な小麦畑で、栽培から收穫調製に至るまで一切機械の力を藉り、彼の屋内で營む工場生産そつくりのものさへ少くは無い、依つて小麦工場ホトトと名づけられるほどである。ところが米作となると小麦作とは反對に農家一戸當りの經營面積は普通極めて狭く、それに至極簡單な農具を使つて極度に勞力に集約的な耕作方法を用ひて居る。そして單に農家の耕作面積が狭い許りではない、一農家に屬する水田の一枚々々は更に一層狭く全く猫額大と稱するより外なきほどだ。

これはいふまでもなく水田の水深を均しくする必要上、傾斜をなせる土地ではしかせざるを得ない譯ではあるがそのために機械の使用を尙更困難ならしめる、之に反し岡山縣兒島灣の干拓地のやうな平坦な處では、一枚の水田面積が仲々廣くなつてゐる。且つ土地の開拓が古くなれば、所有權移動の結果同一農家に屬する小區劃の水田が自ら所々方々に散點するやうになる（支那の水田でも同様）、或學者はそれを形容するに星散なる文字を以てしたが、より以上の適字は求め難からう。耕地整理事業の必要はそこから發生するのであるが、我が國水田に於ける同事業は他國の水田にその比を見ざるほどの大發展を遂げるに至つた。

以上述べたところが生産要素の上から見た小麥作と米作間に於ける大相違の點で、隨つて資本主義的營利經濟の國々即ち西洋諸國に小麥作が盛んであり、自給經濟を主とする國々即ち東洋諸國に米作が専ら行はれる所以であらう。凡そ園藝業を除き世界に於ける普通の農業の中で東洋の米作位勞働に集約的な（*arbeitsintensiv*）ものは恐らく他に見ることはむづかしからう。それ故自然米作は人口の非常に稠密な地方に適するし、又逆にいへば米作地帯は稠密人口の存立を可能ならしめるものだ。かくして原因と結果と互に相結び相循環するの現象を呈し、稠密人口と米産國との間に密接不離の關係を醸すやうになる、支那・印度・日本の如きはそれだ。この米と人口間の親密關係は非常に大切な事柄である。米はもと／＼他種の作物に較べ同一面積の上から極めて多くの榮養分カロリーを生産するため人口の支持力が頗る高まる譯だ。

又小麥地方には役畜が多いが水田地方にはそれが少い。何故かなれば、人口の多い米産國では人間の食料たる米の生産に全力を盡すのであつて、家畜などの飼料の生産に充つべき餘分の土地を殆んど持合はせて居らぬからだ。——尤も水田地帯の附近に山野が存在して、家畜のため天然飼料などを供給し得る所では役畜の維持も亦多少可能であらう——。元來の性質上その生産には飼料の特別の給與を全然必要とせぬ所の彼の天然の海産物に恵



まれてゐるところでは、人間の副食物をそれから仰ぐことが出来るので、飼料として多費を要する肉食や酪農食の必要少く、随つて畜産業の發達が遅れる譯だ、我が國はその適例と謂はねばならぬ。唯一つ養鶏業は我が國に於て高度の發達を遂げて居るがそれは餌料を多く海外から收寄せるので、これが生産のために國內の大切な耕地をそれほど侵略せずに済むからである。

以上は米麥の生産のことであつたが、更に收穫物の貯藏についていへば、小麥の輸出國に於ては大仕掛のエレベーターに小麥の大量をバラ積するの便益がある、併し米に對してはそれほど大規模のものは存在せぬやうだ。但し我が國最近に於ける米の貯藏はその規模といひ完全さといひ頗る優れたものといへよう、そして今日米の大貯藏は國家が營んで居る。我が國には昔から支那に倣つて義倉・社會や常平倉の制度があつて、米の貯藏は古くから相當進んでゐたものゝやうであるが、最近米穀問題が尖鋭化するに隨ひ一層の發達を遂げるに至つた譯だ。

これは餘談であるが、常平倉は近頃米獨などの文献に屢々現はれるやうになつたが、米國では *ever normal granary* と譯され、これは全くの適譯と思はれるが、獨逸では或學者が常平倉は字義的に *"Dauernd-gleichmäßige-Getreidewirtschaft"* を意味するものとすつたのは、意譯としては結構ながら、直譯としては最後の文字が前の英語に比べ聊か劣つてゐる。

次に貿易の有様はどうであるか、小麥の場合は生産地と消費地とが明かに分離し、且つその間の距離が普通は頗る大であり、加ふるに取引數量が多いといふ關係から、小麥の國際貿易上の地位は甚だ重大と謂はざるを得ぬ彼の濠洲英國間の航路の如きは小麥の運輸距離として最たるものだ。小麥は英國や歐大陸（獨伊兩國が以前は主であつたが、後にも述べる如く食糧自給政策の實施により此等兩國は退却を始め、近頃は白耳義・和蘭・瑞西などが進出して來た）の如き大消費市場を控えて居る。中でも英國は小麥輸入國としての第一位をこゝ何十年來堅

持して微動だもせぬ所が目立つ、自國産の小麥では年に何週間位しか凌げぬ。要するに世界の火工業國が同時に小麥の大消費國で大輸入國である。尙ほ英吉利や歐大陸の外ブラジル及び支那も小麥の大輸入國だ。ブラジルでは小麥の輸入は第一次歐洲戰爭前に比べ近頃激増を來し輸入食糧品の首位を占めるやうになつた。そして輸入小麥の九割までは隣國のアルゼンチンから流入する。斯様な小麥の輸出入地間の相互的接近は稀なことであるが、尙ほ歐大陸に於けるバルカンと獨伊の關係もそれと類似する。

次に小麥の輸出國に移らう。アルゼンチン及び濠洲は特に大なる小麥の生産國とはいへないが、その輸出國としてはカナダや米國と共に重要な地位を占める。——太古羅馬の隆昌時代には、埃及は世界に於ける小麥取引の最大中心であつて世界の穀倉の觀を呈し、年々羅馬に二千萬ブツシエルの小麥を輸出した。小麥作は新らしい土地へ土地へと移り行くが、米作の大勢はさうではない——又ルーマニアを始めドーナウ流域諸國も歐洲に於ける小麥の主要輸出國であることは人の能く知る所である。但し曩に第一次歐洲戰爭中此等の諸國よりの小麥の輸出は見る影もなく激減したが、カナダ及び米國よりの輸出小麥の増加に依て大部分補はれた。彼の大戦の勃發前までは露西亞は小麥の輸出國として支配的地位を占めてゐたが、それ以來は海を超えたる新大陸即ち前述の四ヶ國が低廉なる生産費を利用して益々小麥界に飛躍するに至つた、かくして同戰役を契機として露西亞は世界に於ける食糧過剩國たるの地位を失墜し、それに代つて檜舞臺に現はれたのが彼等四ヶ國であつた。

米は前述の如く大體自給に重きを置いて作られる作物であるので、自然出廻數量が割合少く随つて小麥に比すべき大市場は持たない。米の世界總産額に對する輸出来の割合即ち米の國際取引に上る割合は微々たるもので一割位に過ぎぬ。米の生産過剩國即ち主なる米の輸出國はビルマ・佛印・泰の三國であるが外に尙植民本國に對するものとしては我が朝鮮及び臺灣を數へることが出來よう。或人は上述三國の南方諸地域を以て大東亞共榮圈内

のウクライナだといつて居るが、全くその通りでこの圏内の穀倉である。このビルマ・泰・佛印の三國では、輸出米の價額は國により輸出品總額の四割乃至七割に當るといはれる。ビルマのラングーン、泰のバンコック、佛印のサイゴンの三港は昔から米の輸出港として世界的に有名な處だが、最近は又別な意味で吾々の耳に親み深い地名となつた。それに對し米の輸入國の主なものには印度・支那・日本・マレイ・セイロンなどだ。支那は米や小麥の大生産國であり同時に大消費國であるのは特筆に値する。支那は從來小麥をカナダ・濠洲など英國の勢力圏内から入れてゐたが、今後は如何になり行くものだらうか。米の輸出距離は僅量の歐洲向を除けば、最も遠いとこゝろでビルマ・日本間であつて、彼の小麥の如く濠洲から英國に至るやうな大距離輸送は存在せぬ。南東アジア以外の地方との間の米の取引は米の世界貿易の僅か四分の一以下に止まる。又小麥の場合は前述の通り大消費市場があつて、小麥の世界價格設定の力を有つてゐるが、米の場合にはそれほど大なる消費市場がなく、隨つて米の世界的動きも小麥に比べて頗る微弱で、米の世界價格設定の力は乏しい。要するに米は世界貿易上小麥ほど重要な商品ではないのである。

小麥の大消費市場たる英國は米國・カナダ・ソ聯・アルゼンチンや英領印度その他から小麥を輸入してゐるが今此等南北兩半球を通じて見る時は、英國は一年中殆んど絶間なしに小麥を搬入してゐることになる、少し古い調査ではあるがそれによると輸入時期は左の如し。

米國及びソ聯から

八一九—十月

カナダから

十一月

米國のオレゴン・ワシントンなど

二月

太平洋沿岸諸州から

三月

アルゼンチンから

三月

濠洲から

印度から

四月

七月

斯様に世界中の小麥が大消費地の英國目がけて間斷なく流入するといふことは、之はつまり小麥の栽培はその地理的分布が極めて廣く、北半球・南半球・西半球・東半球に跨り、隨つてその收穫は年中殆んど何時でも世界の何れのところにてか行はれて居る結果である。かゝる小麥の世界的大市場への年内絶間なき動きといふものが小麥價格の季節的變動の幅を縮少し價格を安定せしめる力は大いなるものと謂はねばならぬ。然るに米は生産地域がアジアの一部に纏つて居るので、世界的に眺めると米の收穫は同時に起つて、一時に偏り、小麥のやうに集散が順序能く行かぬ、その結果米の輸出國の間で烈しい競争を惹起し、米價を壓迫して米作農家を惱ますことになる。我が國でも米の統制、米の管理の制度に移るまでは、米價といふものは同じ年内でも時期により高低があり、收穫直後に安く出來秋に近づき品薄の時期になるほど次第に價格が高まり行くのが常態であつた。これは前にも一寸觸れた通り農家に悪影響を及ぼすものだ。といふのは農家は元來經濟力が弱いため折角の收穫物を永く持ち耐へることが出來ず、出來秋の値段の安い時季にみすく、損をしながら安く賣放ち、後時が経ち價が高まつて來たときに今度は却つて自分の飯米までも買求めねばならぬ羽目に陥り、その結果耕作農家で貧弱な者は益々苦境に沈み行くの外はなかつたのである。併し我が國では今日は周知の如く米穀統制の強化により米價は安定し上のやうな弊害から幸ひ免れることが出来るやうになつた。又米價の年次的變動は我が國に於ては從來極めて大であつたが、これ亦米價統制により頗る縮少するに至つた。——我國米價の年次的大變動の外、昔は米價の場所による高低の差も甚しきものがあつた。例へば明治二年米價が全國中最高のところは福島縣で一石十三圓七十五錢、最低は佐渡縣で一圓六十五錢その比率は實に八對一であつた。同年は東北の凶作であつたといひながら、

かゝる大差を生じたのは交通不便が主因をなしたものと云へよう。明治元年及び同三年に於ける最高最低地間の米價の比率も一對三乃至四であつた。——然るに上海の米價は事變前の昭和十一年には石平均九圓九十四錢であつたものが十六年には百三十四圓に狂騰した、即ち僅か五年間に十三倍以上に上つた、貨幣價値の變動も考へねばならぬではあらうが何せ驚くべき米價の變動である。かくして食糧問題の解決は重慶政權の最大の悩みの一つとなり、一昨年七月全國食糧管理局の設置を見るに至つた。

小麥は茲數十年來、その生産國就中小麥の重要輸出國に於て國家政策の對象とされてゐた、即ち小麥作農家は色々な方法で國家の保護援助を受けたのである。然るに米の場合は世界的にいへば小麥と異り國家から輕んぜられる傾があつた、但し我が國は例外でこの國では米の問題は常に國家の大問題とされたのである。小麥の國でも又米の國でも、國家の大體の政策は過去十何年かの間は、米麥價格下落の打撃からなるべく農家を救うとするにあつたやうであるが、——主要穀物の輸出國では農家のために、輸入國では消費者のために、又自給國では双方のためにを圖るのは自然の形勢ではあるが——近頃は事情が變つて來て、米及び小麥の輸入國では主として國防上の見地からだん／＼食糧自給政策に轉向するに至つた。一九二九年世界不況の開始と共に小麥消費國に於てはこの政策が強化された。かくしてこの新政策の影響は小麥に最も強く現はれたのであるが、これは小麥の貿易數量が極めて多い關係上然らざるを得ぬ譯であらう。即ち小麥輸入國に於ては小麥の輸入に制限を加ふるに至つた。或人は一九三九年に書いた論文の中に、世界中唯一國でも小麥に對し政府が干渉を加へなかつた國はなかつたと述べてゐる。かくして第二次歐洲戰爭の起つた時は第一次大戰の場合とは違ひ小麥の供給に裕りのあつた時であつた。

食糧自給政策への轉換の適例は米では日本(外地をも含めて)、小麥では伊太利と獨逸とを擧げることが出來よ

う伊太利では穀物戰(Panaglin del grano)を標語に押し立て、進んでゐる——この國への小麥輸入額は第一次歐  
洲大戰前の一九〇九—一三年の五ヶ年平均に於ては尙ほ百五十萬噸を示したが、一九三七・八年の經濟年度に於  
ては僅かに二十六萬噸に過ぎぬ(Werner Zimmermann, Die Welgetreidewirtschaft im Krieg und Frieden [Ber-  
lin, Landw. Bd. XXV, Heft 3/4 S. 560])。一九三七年には伊太利の穀物戰爭指導者が遠くブラジルに招聘さ  
れて、彼地の小麥増産運動に協力を要請されたことがあつた。——又この運動では獨逸も中々努力を拂ひつゝあ  
る、この國でもGetreideacht と云ふ同一の旗印を用ひて居るが頗る好成績を示し、パン用穀物の入超額は獨  
逸では一九二七年に九億マーク以上であつたものが、一九三六年には二千萬マーク以下に降つた。以上の如く米  
と小麥の自給政策の代表者が樞軸國たる日・獨・伊三國であるといふことは愉快にも又興味深い事柄であらう。

支那は久しい間産米不足のため防穀令に依て米の國外輸出を禁じてゐたが、近頃は却つて米の輸入制限を斷行  
する位になつた。そして重慶政權は奧地支那に於て不急作物の栽培を禁じて食用作物への轉換を命じたのであ  
る。——日本でも不急作物の重要食糧への代替は府縣では桑にその適例を見るのであるが、北海道の輸出作物に  
も標本的な著例を見ることが出来る、即ち薄荷畑が今までは一萬三千町歩もあつて世界に君臨してゐたがこの  
時勢となつたので、後に僅か四千三百町歩を残り、八千七百町歩といふ大地積を他の重要食糧作物たる馬鈴薯  
(之は食料の外アルコールの主要原料)や麥などに向けようとしてゐる——その他佛印・泰・マレイ・蘭印では  
何れも近來米穀政策を強化した、即ち産米不足に苦しむマレイでは増米計畫を樹て、又蘭印では今回の戰前日本  
や比島の米價安定政策に倣はうとして居たし且つ貯米も恐らく實施したことであらう。

近代的意味に於ける米穀政策としては、我が國が先鞭を着けたやうなものであるが、その政策たるや頗る周密  
で最も進歩的なもので他國に模範を示すほどだ。即ち米の生産・配給・消費から價格に至るまで凡てが統制下に

置かれることになつた譯で、中でも増産と消費規正とが食糧問題解決の二大目標である。比島の如きは最近即ち大東亞戰爭勃發の何年か前既に我が國の米穀統制を模倣するに至つた。比島では米價が農家に低くして消費者に高く、米穀界に投機が横行し、又米の不足から治安問題が發生して來た。かくして昭和十一年には米價安定の目的で營團が組織された。

今回の歐洲戰爭を契機として、小麥の生産輸出國と輸入國との間に小麥を中心として一大混亂が捲き起された。即ち小麥の輸出國側では小麥の過剩を來し、穀物倉庫が充滿するにも拘はらず小麥の輸出は杜絶状態に陥つた。——カナダ及び濠洲では今回の歐洲戰爭が始まつてから輸出に向くべき小麥の數量は實にその年の收穫高を超過するやうになり、その結果小麥市場に大壓迫を加へた。——依つて小麥の輸出國に於ては、小麥の最低價格の公定や小麥の作付制限にまで進展した。それに反しヨーロッパやアジアにある小麥の輸入國では、國內は饑饉に瀕しながらも尙ほ外國から小麥の取寄せが出來ない。こゝに於てか政府はなるべく多量の小麥の供出を農家に奨励したり（獨逸では農家のパン用穀物の供出量は成規の數量を突破したがこの國では穀物の外牛乳の供出も非常に好成績を擧げ、遂に米國に次ぎ殆んど世界第二のバター生産國となつた。二千四百萬頭の畜牛を有つ獨逸はその六千七百萬頭を有する米國に比べバターの産額は僅か二割五分減に過ぎぬ、此等農畜産物供出上の努力は愛國精神の發露を物語つて居る）、小麥の買溜や家畜飼料としての小麥の使用を禁じたり——獨逸では「パン用穀類を飼料に向けるのは利敵行爲だ」"Wer Brotgetreide verfüttert—hilft dem Feinde"との標語が行はれて居る。日本でも靱や米を牛や鶏に事變後米價の安い時に與へて、一層米不足を助長したことがあり、この有様を見て心ある一部の消費者側から却つて米價引上の聲が出て來たことさへあつた——又小麥・小麥粉及びパンの價格引上を禁じたり、小麥の貯藏量を殖したり、小麥の作付を増させたり、又多くの歐洲諸國では小麥粉の中に玉蜀

黍やライ麦や馬鈴薯の粉を混入させたり、又は小麦粉の製粉歩合を増させたり、或はパンは製造後十二時間乃至二十四時間経たぬ内は發賣を禁じたり、或は又甘パン・ロールパンなどの配給量を大いに減らすといつたやうな消費規正にまで及べる様々な統制政策をば小麦やパンに向つて各國が實施したのであつた。取り分けパンの配給上に於て極端に嚴格な例としてはポーランド・ベルジアム・スペインの三國を擧げることが出来よう。即ち此等の國々では一人當りのパンの購入量をば戰前の實に五分の二乃至三分の二にまで制限したのであつた。而かもこれを重労働者にも適用したとあつては全く驚かざるを得ぬ。然るに上とは反對にこの方面に極めて寛大なのは、一寸豫想外の感じもするであらうが獨逸であつて毎週一般の消費者や農業者や重労働者に對し夫々パンの特配を與へた。これが若し勵行されたとしたならば、その結果に於て實際上パンの消費節約には餘りなるまいとさへいはれてゐる程だ、如何にナチスが食糧營養問題を尊重したかがこれでもほど判るであらう。

英國はあれでも昔は小麦の大輸出國であつたが、一度十九世紀の半頃（正確には一八四六年）に世界の新開地から小麦の輸入が始まつてこのかた輸入が次第に殖えて、今日では世界第一の小麦輸入國となつて仕舞つた。同時に英國は一時國の誇りとせる穀作農業が亡んで畜産國として再出發するの止むなきに立ち至つた。サザンブトン港から上陸してロンドンへ向ふ鐵道沿線、車窓の兩側に廣々と展開する緑の牧場は即ちそれを物語るものであらう。我が日本も明治二十年代の初め頃までは年々平均二三十萬石の米の輸出超過を見たほどであつたが、――輸入を差引かずに單に輸出だけを計算する時には、明治二十年より同二十四年に至る五ヶ年平均に於ては實に約八十三萬石といふ多量の米の輸出を見たのであつた、實に隔世の感なきを得ぬ――今日は朝鮮、臺灣の如き外地から莫大の米を入れ、それでも足らずに外米の輸入消費を必要とする世の中となつたのである。

英國は今日小麦の栽培面積が激減し、そのために小麦の輸入を見るに至つたのであるが、我が日本の米作面積



は昔から随分殖えて来たにも關せず、米を多量に植民地若くは外國から取寄せねばならなくなつたといふことは作柄の劣化或は開戦といふやうな最近發生の原因を除き我が國人口の急増の結果と思はれる。今大東亞の戰場に相見えて熱戦を續けつゝある我が國と英國とが、一方は米他方は小麦に對し昔は何れも輸出國であつたものが、今日は形勢全く一變するに至つた。英國の逆轉振りは極端な例ではあるが、この日英兩國とも世界の大工業國たる點に至つてはその揆を一にして居るのである。高温多濕の自然的條件に恵まれて古來米作が盛んであり、又工業の興隆せる今日も尙ほ農業政策を輕んぜざる我が國と工業のために殆んど農耕の業を棄て、顧みなかつた英國の今後の勝敗は自ら瞭かであらう。

最後に大東亞共榮圈内の食糧問題について一言致して見よう。非野農相が昨年十二月中東京放送局からこの問題に關し講演放送をされたが、その内に共榮圏の米の需給現狀につき左の如き説明を行つた。(十)は生産過剰で輸出餘力を示し、(一)は不足で輸入必要量を示す。

佛印及び泰令計

(十) 二、二〇〇萬石

マレイ

(一) 一〇〇〇

支那(不作の際)

(一) 一、〇〇〇

比島

略ぼ自給

我が國

(一) 一、〇〇〇

計

(十) 二、二〇〇  
(一) 一、〇〇〇  
三、二〇〇

上表を見る時は共榮圈内の米の過不足は餘りにも綺麗に相殺するやうであるが、それは兎もあれ、非野農相の言葉ではプラス・マイナス・ゼロだといはれた所から判斷すれば我が國の一千萬石の不足分は共榮圈内より補ふ

やうな風に取れたが、その後農林當局の説明では内地外地を一個の自給圏と看做し他には頼らぬ方針のやうにも思はれる。——國民の主要食料たる米をなるべく帝國内に於て即ち内地と外地に於て自給するのが最も安全賢明な方法であり、遠く南方地域に位する米の大輸出に依頼することは極力避けねばならぬ、殊に戰時輸送のため船舶がいくらあつても足らぬ時は尙更である——若しも後の説の通りに實現するとすれば共榮圏内の南方諸地域に於て總計一千万石の過剰を生ずる計算となるし、その上右の表には世界に於ける米の最大輸出國たるビルマが抜けてゐるので（米の關係國としては外に尙ほ蘭印があるが、この國に對しては米の不足説もあれば、又自給に近しとの説もある）、それを圏内に入れるとせば益々米の過剰を來すことにならう。前に私は外國の學者の説ではあつたが、世界に於ける米の過剰は將來中々起り得まいと述べて置いたが、それは畢竟平和時の全世界を眺めてのこと、固らずも大東亞戰爭が火蓋を切つて茲に名實共に世界大戰爭となり、米の歐米輸出の途が塞つた今日、大東亞共榮圏の内だけでは米の過剰現象を一時生ずることも當然とせねばならぬ。

大東亞共榮圏内の各國は米の過不足を互の間になるべく相調節して適正配分を圖ることが將來永く相共に生くべき大切な一の條件である。圏内の他の幾つかの重要物資の場合（ゴム・砂糖・錫・植物油・規那の如きは今後當分の間生産過剰に陥る危険が濃厚といはれる）と同様、米の場合にも生産過剰の現象が將來起るものと見て之が對策を練ることは頗る大切な事柄と思はれる。

ビルマ・佛印・泰三國に於ける米の過剰に對しては、圏内の隣接諸國との間に有無相通を圖ると共にそれでも甘く行かぬときは他種の作物を以て代らしめる必要が或は生ずるやも知れぬ。同時に又定着民族の米の消費を高めて生活水準を引上げることも考へられるが、——砂糖が餘ればアルコールに作るとか、油が餘れば人造バターやグリセリンや石鹼などに作るとか、同じ共榮圏内の過剰産物でも工業的用途に向け得るものは便利だが、併し

米の如く工藝的用途の少いものは食用の分量を進めるより外はない——作物轉換問題がより一層重要な問題であらう。依つて共榮圏の指導者たるべき我が國としては早速現地について調査研究を始め適正なる對策を樹立する必要がある。帝國内では米の増産を、又共榮圏内の他國では多少米の生産制限をなすといふ結果となるであらう。併し共榮圏内で、少しは過剰な位に米の生産が擧がるといふことは、當該諸國に取り貯水池の役目をなして幸ひな許りでなく、平生は外米を餘り當てにせぬ積りの我が國に取りても、萬一凶作の場合の安全瓣となるので喜ぶべきことゝ謂はねばならぬ。

次に小麥（小麥粉を含む）に就ては大東亞共榮圏内に今まで輸入されてゐたのはカナダ及び濠洲産であつた關係上、今後は濠洲が圏内に入らぬ限り圏内に於て小麥の不足を感じるに至るであらう。同時に濠洲は小麥の過剰に苦しむものと見ねばならぬ。——小麥の外これは食糧ではないが、圏内で將來不足を告ぐべき主な農畜産物としては羊毛及び棉花を數へることが出来よう。——それ故食糧問題解決の見地から眺めても、濠洲が他日我が大東亞共榮圏内に包容されるならば、相互に取り遣だ喜ばしきことゝ思ふ。

以上に於て私は世界に於ける二大食糧たる米と小麥とを捉へ來つて種々の方面から比較検討を試み、最後に大東亞共榮圏内に於ける米麥の需給の將來を豫想し、食糧として一は過剰を示し他は不足を示すべき不思議な運命を有することを述べて、これが對策の決して忽にしてはならぬといふことを説いたのである。

最後に本文の起草に際し、V. D. Wickizer, *Rice and Wheat in World Agriculture and Consumption* (Wheat Studies Vol. XVII, No. 6 March 1941) を非常に参考にしたことを謝して置かたう。  
(昭和一七・一一・二四)